



## 令和5年年頭のごあいさつ

塾頭 高橋 光雄

明けましておめでとうございます。

塾生、塾友の方々はじめ皆さまにおかれましては、令和5年の年明けを、新たな清々しいお気持ちで迎えられたことと存じます。さまざまな思いや出来事があっても、除夜の鐘を聞き新年を迎えますと、今年がどうかよい年になりますようにと心から願い、身が引き締まる思いをするのが、日本のお正月であらうと存じます。

昨年11月から暮れにかけては、新型コロナウイルス感染症の第8波による感染拡大が止まらない状況となりました。病床使用率も50%を超える日が続き、県では「福島県医療ひっ迫警報」を発出しました。

国外に目を転じますと、2月に始まったロシアのウクライナ侵略がなお続いています。西側諸国の支援があるとはいえ、極寒のなかウクライナ軍民の不屈の抵抗と反撃には頭の下がる思いでいっぱいです。また、この戦争を契機に、エネルギー、食糧危機が顕在化し、様々な分野における安全保障の見直しが喫緊の課題となっております。

一方、昨年(公財)立教志塾では、医師として生涯現役を通し、塾開設以来30年余にわたり理事長を務めてくださるとともに、その後は名誉理事長として塾生、塾友の精神的支柱であられた渡辺薫先生の逝去という事件がありま

した。また、長引くコロナ禍のため、塾活動は地元講師を中心にした小規模な研修会と「立教」の発行に縮小せざるを得ませんでした。

私は、塾頭に就任した令和2年のご挨拶で、次のように記しました。

「塾があることの意味、塾が目ざしてきたものが何かを考えってきました。今も昔も私たちにとって大事なものは、まず生活することです。さまざまな職場で働き、そこからの収入で成り立つ生活は一見すると堅固のようにみえますが、実は薄氷をわたるが如くでリスクが多いものです。人づくりを目的とする塾が主として道を学び、従として術を学ぶとしているのは、社会がどのように変わっても、生活を担い支える主体として、一人ひとりが己の心の奥底を見つめ、お互いに錬磨し、学習する必要性と、その場を共有する重要性を認識していたからであります」

「塾が主として道を学び、従として術を学ぶ」としているのは、決して塾生に対し聖人君子たることを求めているわけではありません。術を学ぶことは、地域において様々な経済団体、職域団体、趣味の愛好会等で可能です。しかし、様々な行動をとる私たち一人ひとりの主体、一人ひとりの在り様、すなわち「to being」を考え、錬磨することを可能とするのは、立教志以外にありません。

塾の創業者が存命のときは、戦後の価値観を相対化できる自由が常にありましたが、塾生のほとんどが戦後生まれとなった現在、無意識のうちに戦後の価値観に拘束され、それを相対化する自由を見失いがちになります。塾は、いつもこのことを意識し活動したいと考えています。